第5回中央図書館蔵稀覯書展を終えて

庶務課　永　井　由美子

平成7年から年2回ずつ開催してきました中央図書館蔵稀覯書展は、去る平成9年12月2日火～4日木に開催され、第5回を数えることとなりました。この稀覯書展を始めることになったのは、本学の自慢のひとつである稀覯書をぜひみなさんに知っていただこうと思ったからです。本学には、稀覯書といわれる大変珍しい貴重な古書や限定本を数多く所蔵しておりますが、利用よりも保存に重点をおいているため、普段はみなさんに閲覧していただけません。かと言って、しまっておくだけでは"宝の持ち腐れ"になってしまいます。見て知っていただいてこそ価値を持つものではないでしょうか。みなさんは稀覯書といってもピンとこないかもしれませんが、中には家が一軒建つくらい高価なものもあるのです。俗っぽい例えですが、とにかくそれほど価値のあるものもあります。

さて、第5回稀覯書展のテーマは「日本の古典」として、わが国の古典文学作品を主に展示しました。中学・高校時代に学んだものを中心にしたので親しみを持っていただけると思ったからです。

準備を進めるにあたり、担当者一同学生時代に学んだ古典を思い出そうとするのですが、ずいぶん前のことなので大変苦労しました。文学年表から、記憶の中にあるものをピックアップすることから始まりました。「あっ、これ習ったよね」と懐かしさ半分なのですが、形にしていくのは大変でした。

今回は、より内容の深いものにしたいということもあり、いつも展示資料の説明をしていただいている河合忠信先生の他に、文芸学部の小川幸三先生、村瀬憲夫先生、高田衛先生、文芸学部の大学院生の方にお願いして資料の選書や解題についてお力添えいただけることになりました。そうして最終的に主に平安時代から江戸時代にかけての刊本、写本、復製本等約50点を展示することとなりました。

河合先生に資料説明にありましたが、それぞれの時代によって書物の特色があります。日本の古典、主に写本の歴史をたどっていくと、まず、天平時代は、天皇独裁の時代で天皇と僧侶のための古写本や写経が中心でした。平安時代の文化は、貴族、主に、女性の貴族が中心であり、女性は仮名書を好んだため仮名文の写本が激増したそうです。鎌倉時代は、伊勢物語、源氏物語の時代、南北朝・足利時代は連歌の時代で、由緒ある写本「後撰和歌集」（本学蔵）はこの時代のものです。後撰和歌集や古今集は、連歌をつくるためのお手本となったそうです。秀吉、家康が強大な中央権力をもっていた桃山・江戸時代初期にかけては軍記物が中心となりました。江戸時代中・後期が大衆文芸が盛んになり、井原西鶴著「好色一代女」（本学蔵）はまさにこの時代のものです。また、この頃は公卿による写本筆写が続いており、嫁入り本と言われる豪華に彩色された絵巻物や絵本が代表です。「奈良絵本　鶴亀・松竹物語」（本学蔵）がそれです。

本学蔵書の他に、ご厚意で、高田先生に『日本水滸伝』、河合先生に『俳諧三十六歌僊』をお借りすることができ、より充実したものになりました。

この稀覯書展もおかげさまで3日間で220名の方にお越しいただき、好評に終えることができました。ご協力いただいたアンケート結果からみても「本学にこんなものがあるのを知らなかった。」「研究のヒントになった。」「なじみのある書物だったので興味を持った。」という感想をいただきました。

次回は、未定ですが皆さんのご意見を参考にさせていただき、皆さんが興味を持てるような企画を考えていこうと思っています。

今後も一点でも多くの資料を目にしていただける機会をもうけて、またそれがきっかけになってみなさんが図書館に足を運んでくれる回数が増えるよう私たちも努力していきたいと思っております。